

平成25事業年度の業務運営に関する計画

平成26年3月

独立行政法人海洋研究開発機構

序文	2
I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するために取るべき措置	2
1. 海洋科学技術に関する基盤的研究開発	2
(1) 重点研究開発の推進	2
(2) 統合国際深海掘削計画（IODP）の総合的な推進	15
(3) 研究開発の多様な取り組み	16
2. 研究開発成果の普及および成果活用の促進	17
(1) 研究開発成果の情報発信	17
(2) 普及広報活動	18
(3) 研究開発成果の権利化および適切な管理	18
3. 大学および大学共同利用機関における海洋に関する学術研究への協力	19
4. 科学技術に関する研究開発または学術研究を行う者等への施設・設備の供用	19
(1) 船舶および深海調査システム等の供用	19
(2) 施設・設備の供用	19
(3) 「地球シミュレータ」の供用	19
(4) 地球深部探査船の供用	20
5. 研究者および技術者の養成と資質の向上	20
6. 情報および資料の収集、整理・分析、加工、保管および提供	20
7. 評価の実施	21
8. 情報公開および個人情報保護	21
II 業務の効率化に関する目標を達成するために取るべき措置	21
1. 組織の編制	21
2. 柔軟かつ効率的な組織の運営	21
3. 業務・人員の合理化・効率化	22
III 予算（人件費の見積もり等を含む。）、収支計画および資金計画	24
1. 予算	24
2. 収支計画	25
3. 資金計画	26
4. 自己収入の増加	26
5. 固定的経費の節減	26
6. 契約の適正化	26
IV 短期借入金の限度額	26
V 重要な財産の処分または担保の計画	27
VI 剰余金の使途	27
VII その他の業務運営に関する事項	27
1. 施設・設備に関する計画	27
2. 人事に関する計画	27
3. 能力発揮の環境整備に関する事項	27

序文

独立行政法人通則法（平成 11 年法律第 103 号）第 31 条の規定により、平成 25 年度の業務運営に関する計画（独立行政法人海洋研究開発機構平成 25 年度計画）を定める。

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するために取るべき措置

1. 海洋科学技術に関する基盤的研究開発

(1) 重点研究開発の推進

海洋科学技術に関する基盤的研究開発を推進するため、以下の事項を重点研究開発と位置づけ、その成果の社会還元を見据えつつ、総合的な観点から研究開発を行う。

① 地球環境変動研究

地球温暖化を含む気候変動の要因を明らかにするための観測や解析、古気候の再現を含む総合的な予測モデルの構築と数値実験を行うことにより、大気、熱・水循環および生態系に与える影響の評価、沿岸海域およびアジア地域における地球環境変動に関する予測精度の向上、一般社会における気候変動への対策等、地球規模での問題の解決や防災・減災に向けた対策に貢献する。また、全球地球観測システム（GEOSS）等国内外の関係機関と連携した地球環境変動研究を行うことにより、国際的な地球観測計画の策定・実施や気候変動に関する政府間パネル（IPCC）における地球環境問題の検討に貢献する。

このため、平成 25 年度は以下の研究を実施する。

(イ) 海洋環境変動研究

海洋環境の根幹である海洋大循環、海洋生態系、および海洋における物質の輸送過程等との相互関係を中心に、気候変動が海洋環境に与える影響とそれらによる複雑な応答過程を理解することにより、気候変動に対する海洋の役割を明らかにする。これにより、将来の気候変動の予測や対応策の策定に資する。また、全球地球観測システム（GEOSS）等の国際的な観測計画の策定に寄与する情報を提供する。具体的には、

- a. 海洋研究開発機構（以下、「機構」という。）および関係協力機関の船舶を利用し、太平洋・インド洋・南大洋を対象に、自動昇降型漂流ブイ（アルゴフロート）を投入し、他観測システムのデータも利用して全球および領域における海洋環境の季節・経年変動等の解析を進める。また、太平洋におけるアルゴフロートの追跡、データ品質管理、データ公開を受け持つ「太平洋アルゴリージョナルセンター」を運用し、太平洋・南大洋でのアルゴフロートデータを気候変動の観測・研究に耐える水準に管理する。平成 24 年度までに黒潮続流域・混合水域に投入した酸素センサー付フロートによる高時空間密度のデータ等により、水塊の形成・配置の変動や生態系への影響に関する解析を進め、その結果をまとめる。さらに、海洋工学センター等と共同で開発した大深度観測用次世代フロートを活用する。平成 23 年度に実施した WOCE 再観測（MR11-08、P10）で得られたデータをデータブックとして公開するとともに、平成 24 年度の南大洋航海（MR12-05）で得られたデータの品質管理を行う。10 年スケールの全球に

おける貯熱量変化や二酸化炭素蓄積率についての知見をまとめる。既設の黒潮続流域に表面ブイを維持するとともに、大気海洋間の熱フラックスなどの時系列データを収集し公開する。ブイ等から得られたデータを解析し大気海洋間の相互作用に関する研究を進める。得られた知見をもとに GEOSS、政府間海洋学委員会 (IOC) 等へ情報を提供する。

- b. 機構内外で取得された全球海洋観測データを生物化学変量まで含めて 4 次元変分法データ同化 (異なる時空間スケールを持つ様々なデータを数値モデルを活用して時空間的に矛盾なく統合する) 手法を用いて 4 次元の均質な海洋環境再現データセットを作成・公開する。作成したデータセットを用いて、プログラム間・チーム間連携の下、観測・モデルのみからでは取得困難な熱・物質循環移管する新しい科学的知見を得る。

(ロ) 熱帯気候変動研究

太平洋からインド洋にかけての熱帯域で発生し、地球規模の気候に影響する大気・海洋の変動である、エルニーニョ現象と、そのインド洋版といえるダイポールモード (IOD) 現象、ならびにモンスーンや大気的主要な季節内変動であるマッデン・ジュリアン振動(MJO)について各現象と、それらの相互関係に関する研究を行うことで、全球規模の地球環境変動に関する予測精度の向上等に貢献する。具体的には、

- a. インド洋・太平洋熱帯域のブイ観測データを基礎に解析研究を実施する。インド洋では IOD と海洋変動の相互作用を中心に研究する。太平洋では長期データをもとに熱帯域の長期大気海洋変動や西太平洋の海洋循環等の研究を行う。観測では CLIVAR/SPICE 等と協力し西部太平洋の循環と熱帯の気候変動との関係の観測研究のため設置したブイを回収する。これまでに構築した統合データの Web システムを運用し、科学的知見に基づく付加価値のあるデータの公開も合わせて行う。また、アジア各国でブイによる観測研究に関心が高まる中、米国とともに太平洋ブイの科学レビューを行い、観測と研究への協力を促進する。
- b. 冬季モンスーンと熱帯擾乱のもたらすインドシナ域の豪雨現象に注目し、平成 22 年度および 24 年度冬季に実施した 2 回の環南シナ海集中観測 (VPREX2010・VPREX2012) の結果を中心に解析を行うとともに、PALAU2013 に同期した集中観測を実施し、夏季モンスーンの解析を進め、取りまとめを行う。また、既存定常観測点の維持と歴史データの収集を進め、降水の長期変化とエルニーニョ現象・MJO との関係を調べる。インドネシア海大陸域では、これまで実施した気象観測データ、歴史的資料、降水安定同位体試料を用い、エルニーニョ現象やモンスーン、MJO との相互作用研究に基づく海大陸沿岸日周期対流の総理解を進める。上記で収集したデータは国際共同研究(MAHASRI・AMY)推進のため公開準備を進め、国際ワークショップ等を開催してこれを主導する。
また、平成 23 年度実施した MJO 発生過程の解明をめざした国際集中観測計画 CINDY2011 の中核機関として、解析研究を進めるとともに、データの公開を実施する。パラオでの連続観測を継続し、また、夏季の北進する季節内変動をとらえる事を目的とした PALAU2013 集中観測を実施することで日周期から年変動までの大気海洋現象を把握するとともに、季節内変動とモンスーンオンセットとの相互作用等の解析を進める。これまでの長期連続観測や集中観測データのほか、数値モデル等も活用して西部熱帯太平洋域の季節内変動関連の現象の解析を進め、成果を取りまとめる。

(ハ) 北半球寒冷圏研究

海氷変動や永久凍土の融解など地球温暖化等、気候変動の兆候が現れるとされる北半球の寒冷圏を対象に、観測研究、数値実験、モデルの活用ならびに統合的なデータの収集・解析を行うことにより、海洋・雪氷・大気・陸域の相互作用からなる気候システムの変動と過程を理解し、地球温暖化の寒冷圏への影響を評価する。具体的には、

- a. 海洋地球研究船「みらい」の北極海航海や国際連携による砕氷船航海、漂流ブイ、中層係留系などを用いた観測などにより、海洋・海氷・気象観測を実施する。グリーン・ネットワーク・オブ・エクセレンス (GRENE) 事業 (北極気候変動分野)、IARC 共同研究などを含む国内外の北極研究プロジェクト・計画と連携して、急激に進行する北極海環境の変化を調べ、その成果を公表する。
- b. アルタイ山岳域研究サイトおよび北極域観測サイトにおける観測及び観測結果の取りまとめ、サイトに関しては高度集約化を行う。アジア北極域のデータセットの整備及びその公開を行う。衛星データ・観測データ等を用いた陸域雪氷変動の総括を行う。
- c. スーパーサイト(ティクシ・ヤクーツク・モンゴル)と凍土観測網 (シベリア・モンゴル) の観測結果を取りまとめ、サイトは高度集約化を進める。また、各種データセットを用いた植生と凍土の相互作用、湖沼面積変動、水循環に関する観測データ解析およびモデリング研究を統合的に実施し、陸域水循環変動を総括する。
- d. 「みらい」北極航海や国際連携による観測データの取得、及びモデル出力やデータ同化研究から、寒冷圏気候変化の実態把握と中緯度気候への影響評価を総括する。

(二) 物質循環研究

西部北太平洋および東アジア大陸を主要対象領域として、気候変動と環境変動が生態系の動態を介して物質循環を変化させ、さらに気候変動と環境変動にフィードバックする過程を調べるための観測研究とモデル研究を実施する。あわせてモデル研究を検証するための古海洋学的環境復元研究を実施する。具体的には、

- a. 西部北太平洋および東アジア大陸における生態系と物質循環の変動に関する、「みらい」時系列定点観測、衛星による海洋観測、CPR 観測、陸域植生現地観測、衛星陸域植生観測、東アジア域大気組成ネットワーク観測、衛星による大気組成観測、などの統合データセットを作成する。この統合データセットを解析することにより、西太平洋および東アジア大陸における生態系と物質循環の変動と広域分布を明らかにするとともに、この結果を次項 b.におけるモデル検証に役立てる。西部北太平洋の 2 定点において、海洋の生態系と物質循環の変動を監視するための時系列観測を実施する。このため、8月に「みらい」航海を実施する。動・植物プランクトンの精密培養システムを用いて pH や水温、塩分等をコントロールしながら有機物生産や炭酸塩殻の合成などの生態データの取得を継続するとともに、次期中期計画でさらに得る必要のある実験項目の洗い出しを行う。また、次期中期計画のフィジビリティースタディーの一環として実施予定の極域における観測航海の準備を行う。
- b. 海洋生態系のキープロセスの理解とパラメータの最適化を進め、モデルの適用域を拡大するとともに、高解像度物理生態系モデルによりメソ・サブメソスケール物理現象の海洋生態系物質循環への影響を定量的に評価する。古海洋学的環境復元により 1000 年スケール気候変動に伴う大気循環変動に密接に関係した海洋の中・深層循環や物質循環の変動を明らかにする。これにより、全球炭素循環モデルの検証に寄与する。陸域植生変動と大気組成変動の関係を明らかにするため、陸域植生衛星観測データ等を利用した事例解析を行う。加えて、植生の分布変動に対する気候のフィードバックを生態系モデルで評価

する。また、人間活動の影響を考慮した植生動態モデルで将来予測を行う。さらに、福島原発事故由来の放射性物質の大気および海水中の挙動を解析し、陸起源大気経路物質の海洋生態系と物質循環におけるキーププロセスを検証する。

- c. 高解像度大気輸送モデルを用いた長期計算を行い、長期変動の生成要因に関する解析を行う。また、高度なデータ同化手法を多様な観測等に統合的に適用し、長寿命温室効果気体に関する長期間の高品質な解析データセットを作成する。さらに、データ同化および逆解法により長寿命温室効果気体のソースシンクを推定し、炭素循環の変動要因を把握する。
- d. 実地観測データを衛星データや大気化学モデル計算と複合的に解析し、アジア地域において大気微量成分が環境および気候に与える影響について知見を取りまとめる。さらに、最新の知見に基づく将来予測シナリオを基に、化学-気候相互作用を考慮した大気化学モデルを用いて東アジア大陸周辺における大気質の将来予測実験を行う。

(ホ) 総合的な地球温暖化予測と温暖化影響評価に関するモデル研究

これまでに機構が構築してきた全球気候変動予測モデルである「地球システム統合モデル」をもとに、10年から100年を超える長期までの全球的気候変動を予測できるモデルを構築し検証を行う。これにより、長期的な地球温暖化の適応策・緩和策に資する情報提供を行う。また、現有大規模計算資源を最大限活用し、地球温暖化に対する地域的な影響評価について、科学的に信頼性が高いモデル開発を行う。具体的には、

- a. 様々な観測データ、客観解析データ、CMIP5モデルデータ及び気候モデル実験を行い、気候変動に伴う赤道準2年振動の変化を系統的に明らかにする。北半球全域の水文気候変動（季節内変動から長期変化）の実態解明を様々な観測データを用いて行う。また、大陸スケールの陸面水循環過程（積雪・凍土・植生）のモデルの高度化を行い、水循環過程と気候の相互作用過程を、IPCC-AR5のモデル出力を中心としたシミュレーションデータにより明らかにする。氷床モデルと気候モデルを用いた古気候感度実験、また、MIROC、MIROC-ESMによる古気候実験を追加実施し、古気候解析・気候感度解析を行い、氷床コアデータとの比較検討を行うとともに、海水準変動の不確実性の評価を行う。
- b. 地球システム統合モデル（ESM）の高度化に関連して、高分解能シミュレーションと南極昭和基地で行われる南極総合観測との比較研究を通じ、得られた知見を重力波パラメタリゼーションの改良に活用する。乾燥地についてモデルを改良するため、放牧圧の推定とその陸域生態系モデルへの導入や、乾燥地のモデル比較を通じ、植生モデルの再現性改善を試みる。空間詳細なシナリオの開発に基づいた現実的な条件での数値実験を通じ、土地利用改変等の人間活動が取り扱える地球システムモデルの全体性能について取りまとめを行う。大気海洋結合モデル等の高度化として、種々の数値実験により積雲のエントレインメントに関する解析を行う。今後の開発ベースとして、Unified方程式系モデルに千喜良スキームを組み込んだモデルを開発する。今中期計画期間における気候モデル開発の成果を取りまとめ、今後の課題を整理する。気候モデルをベースとしたアンサンブルカルマンフィルターに基づくデータ同化・予測システムを種々の実データで検証し、システムを完成させる。高精度化（特に高解像度化、並列化）を進めてきた新しい氷床モデルについて、並列化版を用いた標準的な氷床実験を実施し、モデルの特性を整理する。棚氷モデルの開発・試験ランを継続し、最適化を進める。南極およびグリーンランドについて現状再現実験と温暖化に対する応答実験を行い、温暖化時の感度の不確実性についてまとめる。

- c. 力学過程と物理過程を高度化した高解像度海洋モデルを用いて全球規模での気候再現性検証実験を実施する。また「京」コンピュータ上で高解像度実験を実施し、気候の再現性を検証する。開発したカプラーを用いて大気海洋結合モデルを構築し、モデルとしての性能を検証する。
- d. 積雲対流解像モデルにおける雲微物理過程モデル及び放射過程モデルの高度化を進める。関東及び北陸域を対象に、高解像領域気候数値実験の実施と、主な河川における水収支の解析を行う。
- e. NICAM の物理スキームの感度依存性を通じて、物理過程の更なる改良を進め、雲降水システムの再現性、バイアスの低減を図る。「地球シミュレータ」を用いて NICAM による全球雲降水システムに関する高解像度の数値実験を行い、衛星観測や集中観測のデータを用いた再現性の検証並びに季節内変動/台風の再現性の解析を行う。HPCI 戦略プログラム及び気候変動リスク情報創生プログラムへの研究協力、超高解像度大気海洋結合モデルの開発を行う。また、NICAM の領域スケール版を応用して開発・運用した予報的計算システムの改善を行う。
- f. 「京」コンピュータの計算資源を活用することにより、雲を解像するデータ同化技術を開発するとともに、アンサンブル予報を雲解像モデルに適用した領域解析予測システムを構築する。そのために、稠密観測データを同化する技術を開発する。アンサンブルカルマンフィルターなど先端的データ同化システムによる雲解像データ同化実験を実施する。アンサンブル予報システムによる予報解析サイクル実験を行い、災害事例のシミュレーションによる実証実験を実施する。

(へ) 短期気候変動応用予測研究

人類の社会生活や産業・経済活動に大きな影響を及ぼす極端な現象や異常気象等の自然現象を生み出す要因となる気候変動や海洋変動について、精度の高い数か月から数年規模の予測研究を行うとともに、関連する諸過程の解析研究を行うことにより、社会からの要請に応える。また、インド洋・太平洋を中心とするアジア・アフリカ地域などで実証研究を推進し、研究成果の国際展開を行う。具体的には、

- a. 大気・海洋結合モデル (SINTEX-F) などによる気候変動予測結果等を用いて、インド洋ダイポールモード現象や「エルニーニョもどき」現象などの気候変動モードの予測可能性、それらがインド洋・太平洋域の気候へ及ぼす影響、季節内変動や数十年規模の長期変動との関連などの研究を行う。また、大気 (AFES)・海洋 (OFES) 大循環モデル、大気海洋結合モデル (CFES、SINTEX-F、UTCM 等) の長期積分結果や領域モデルの結果と観測データ等を用いて、低緯度域から中・高緯度域における気候変動に関わる大気海洋変動過程、その遠隔影響、および海洋変動に対する大気応答等を解明する。さらに、後述の「シミュレーション研究開発」との連携の下、中緯度海洋前線帯に注目した海洋変動の予測可能性や大気海洋相互作用を解明する。
- b. SINTEX-F1 による短期気候変動アンサンブル予測実験を継続するとともに、SINTEX-F2 へ海洋内部データの取り込み等の高度化を施し、短期気候変動予測実験を行う。CFES などの異なる大気海洋結合モデルも用いたマルチモデル予測実験を行う。予測モデル等で用いられるパラメタリゼーションの改良を通じた予測可能性向上のための基礎研究を進め、予測モデルへの実装を検討する。また、アジア・アフリカ域での農業政策にも応用可能な、予測結果情報を取り入れた広域作物モデルのプロトタイプを作成する。
- c. 高解像度海流・波浪・潮汐モデルを用いて潮汐・波浪・海流相互作用および沿岸・外洋相互作用の研究を継続する。また、海洋生態系変動や化学・放射性物質等の拡散に影響を与える海洋変動過程の研究

を行う。これらを通じて沿海海況予測モデルの高度化および実用化を進める。

② 地球内部ダイナミクス研究

日本列島周辺海域、西太平洋域を中心に地震・火山活動の原因、島弧・大陸地殻の進化、地球環境変遷等についての知見を蓄積するため、地球表層から地球中心核に至る固体地球の諸現象について、その動的挙動（ダイナミクス）に関する研究を行う。これにより、巨大海溝型地震・津波への対応等日本近傍における防災・減災に貢献するため、地震・津波・火山活動等についてそれらを引き起こす基本原理の理解に基づくモデル化と予測・検証を行う。

このため、平成 25 年度は以下の研究を実施する。

(イ) 地球内部ダイナミクス基盤研究

地球表面から中心核に至るまで地球の構造・組成とその時空間分布・変動に係る観測・調査、実験・分析および数値実験を行い、地球内部の基本的なダイナミクスの過程を解明する。具体的には、

- a. 東北地方太平洋沖および南海地震発生帯、伊豆-小笠原弧、北西太平洋域の海洋地殻、オントンジャワ巨大火成岩区において、地球物理学的手法による地下構造イメージング研究を実施する。また、高精度の観測データを駆使して、地震・津波をもたらす海底変動、海底資源を含んだ海底下の物質や熱の循環過程、海洋地殻の成長過程をとらえる。さらに、海洋プレート活動を把握するため、広域地下構造探査による観測研究を行うとともに、地下構造探査システムの高度化も実施する。房総半島などの過去の付加体、コスタリカ沖など侵食型と考えられている沈み込み帯において、プレート運動、付加体形成および侵食過程、断層運動について、フィールド調査、解析、数値実験を行い、地震活動に直結する地球表層ダイナミクスの物理的描像を行う。掘削試料と陸上付加体の試料を用いた岩石の内部組織の推定や動的力学実験、および年代測定等により、プレート沈み込み帯の変動過程を明らかにする。南海トラフ地震発生帯掘削計画（NanTroSEIZE）ライザー掘削を主導し、固着域上部付加体を 3,600m まで掘削してその特性の把握と状態の現場計測を実施する。また、沈み込み帯の変動過程と地震発生過程の相互作用を解明するために、高精度マッピング・熱流量・海底微圧変動等のデータ取得・解析を行う。さらに、固着域先端部の地震特性の理解のために、東北掘削・南海掘削比較研究を実施する。
- b. 南太平洋海底の地震・電磁気データの解析によりホットスポット直下の構造を推定し南太平洋プルームの起源深度やスーパープルームとの関係について最終的な答えを得る。海底観測データによって沈み込む前の海洋プレートやアセノスフェアの速度構造や異方性を推定する。滞留スラブの詳細な構造を求め、マントルコアダイナミクス研究チームの成果と併せてスラブ滞留と崩落のメカニズムを推定する。有限波長トモグラフィによって新世代の全地球規模のマントル・コア 3 次元構造を推定する。マントル活動については、海洋地殻の相転移を考慮したマントル遷移層におけるスラブ沈み込みシミュレーションを実施し、さらに 3 次元全球殻マントル対流シミュレーションによって、超大陸の形成と分裂が繰り返すWilsonサイクルの原動力を明らかにする。コア活動については、磁場変動と地球回転変動の相関メカニズムをダイナモシミュレーションによって検証し、液体金属の熱対流に関する計算や室内実験により、コア対流パターンの変動現象のレーリー数、磁場依存性を調べ、地磁気逆転の新しいモデルを作り上げる。10 年以上続けて来た海底電磁気観測所での観測を継続するとともに、新しく開発したベクトル津波計による津波モニタリングを目指してリアルタイム試験観測を開始する。オントンジャワ

海台、シャツキー海台などの LIP 起源岩を対象に、得られた年代、化学組成、同位体データから、白亜紀から現在に至る南太平洋域のスーパープルーム活動の推移を明らかにする。LIP 起源岩、コマチアイト、島弧火山などの火山岩などの揮発性成分の分析データを蓄積し、同時に白金族元素の定量を進め、マントル中のそれら成分の挙動を定量化する。堆積岩の同位体組成から明らかにしてきた地球内部活動と表層環境変動との対応関係を顕生代全時代について明らかにする。熱水実験、岩石摩擦実験などによって、生命誕生に非常に重要な水素のみならず、リン、モリブデン、亜鉛などの生命の発生・進化に重要元素の挙動を探る。

- c. 沈み込み帯（東北日本弧・西南日本弧・伊豆-ボニン-マリアナ弧・小アンチル諸島など）におけるマグマの岩石学的・地球化学的特性を解析し、島弧地殻の進化と大陸地殻の形成過程に関する研究を行う。マントル深部起源のホットスポット（南太平洋・南大西洋・ハワイなど）に産するマグマの岩石学的・地球化学的特性を解析し、沈み込み帯・スタグナントスラブ・マントル深部における分化プロセスを考慮に入れ、マントルの進化に関する研究を行う。地球中心核に至る地球内部の温度圧力条件を再現する超高压実験技術を駆使して、マントル深部・核における相関係・物性を解析し、地球化学・地球物理学的データと融合させて、固体地球の進化に関する研究を行う。これらの研究により、地球内部の物質循環に関する地球内部ダイナミクスモデルを構築する。
- d. 海底ネットワーク（DONET）データを有効活用するためのシステムを整備し、西太平洋域地球物理ネットワークを維持する。海底下と海洋の構造と現象を明らかにするためにこれらのネットワークデータ、臨時海底観測データ等を解析する。地球表層活動研究の基盤となる数値地球モデル構築の一環として、地球形成・熱力学進化の数値シミュレーション研究、地球流体现象の数理モデル・基礎物理過程の研究、および高性能数値アルゴリズムの研究開発を行う。

（ロ）地球内部ダイナミクス発展研究

基盤研究の成果を融合させ、地球内部のダイナミクスを包括的に把握するために、沈み込み帯のダイナミクスの包括的理解を目的とした観測調査研究、科学掘削研究、地球システム内および外との関連研究などの、世界をリードする発展的な研究を実施する。具体的には、

- a. DONET が実施する長期計測機器の開発と設置に協力するとともに、既設の長期孔内観測システムで取得した初期データを詳細に検討し、地震準備過程における地殻変動の定量化を行う。
- b. カスカディア沈み込み帯の地殻構造解析を行い、広帯域地震計（BBOBS）観測を進め、地震発生についての数値シミュレーションに対する束縛条件を与える。日向灘から東南海沖にかけて展開した稠密地震探査・地震観測データの解析を行い、同地域の詳細な地震発生帯プレート形状モデルの作成を進める。また詳細なプレート形状モデルを用いた数値シミュレーションを行うことで、規模の異なる地震イベントのシーケンスについての力学的な評価を行う。また、超大規模地震に発展する断層運動シナリオについても言及する。
- c. 海底ネットワーク、海洋島ネットワーク、海底機動観測などで得られたデータを統一的に処理解析できるシステムの基本部分の運用を開始する。更に、研究に直結する部分のシステムを開発する。
- d. プレート境界域における地殻・マントルの活動について、日本海溝から東北日本を経て日本海に至る地域を対象とし、海域での地球物理観測・試料収集、岩石試料の物性測定・相平衡実験等を実施し、地震・火山活動の発生メカニズムに関する分野横断的なモデルを構築する。西南日本弧・伊豆-小笠原-マ

リアナ弧などの他の島弧との比較研究を実施する。

- e. 海洋地殻の貫通とマントルへの到達を目指すモホール掘削について、国際ワークショップでの検討結果を基に掘削候補地点の検討や構造探査の計画立案を行う。大陸の形成プロセスを解明するための伊豆-小笠原-マリアナ弧における掘削提案について、必要な地質調査・試料分析及び構造探査等を実施する。実効化に向けて動き出した島弧中部地殻までの超深度掘削を強力に推進するため学際的なレビューを実施し論文を執筆する。地球深部探査船「ちきゅう」による南海トラフ地震発生帯掘削、及び東北地方太平洋沖地震調査掘削、並びにジョイデス・レゾリューション号によるコスタリカ沖掘削の掘削試料・検層データ等を用いて、地震断層特性の解明のための地震断層および母岩の摩擦特性、水理特性、応力状態の研究を行う。また、「ちきゅう」の東北地方太平洋沖地震調査掘削で採取された断層試料・間隙水試料の微量元素・同位体分析を行い、断層帯における流体岩石相互作用と断層すべりに関する研究を行う。さらに、「ちきゅう」による下北八戸沖石炭層生命圏掘削の掘削試料の水理特性・熱物性のプロフィールを決定する。東北地方太平洋沖地震震源域掘削で取得した掘削試料と検層データの解析により日本海溝沈み込み帯浅部の地質特性を明らかにする。コスタリカ沖地震発生帯で取得した掘削試料と検層データを解析し、浸食型沈み込み帯浅部の内部構造と応力状態を推定する。三浦・房総半島の地質データ収集・解析により、沈み込み・付加作用を深度 4km まで追跡する。
- f. 地球表層、地球内部、宇宙環境の相互作用による地球大規模変動を理解するため、大気海洋大循環、雲、太陽磁場とフレア発生、水循環と火成活動を取り入れたマントル対流、自転速度変動がある地球ダイナモのシミュレーションを実施する。また高温高压実験、地震学的探査に基づき、コア-マントル境界を通した熱流量を調べる。地球史に起こる様々な気候変動、表層環境変動を対象とし、太陽活動の影響、地球活動の影響を古環境変動解析により明らかにする。地球大気に影響を及ぼす宇宙空間の現象について、特にマイクロからメソスケールの挙動に注目した新たな数値計算モデルの開発・実行を行う。海洋・極限環境生物圏領域と共同で、熱実験、岩石摩擦実験によって、地球内部活動と表層環境および生物活動との相互作用の検証を行う。

③ 海洋・極限環境生物圏研究

海洋を中心とする生物圏について、生物の調査および生態・機能等の研究を行うとともに、資源としての多様な生物における潜在的有用性を掘り起こし、社会と経済の発展に資する知見、情報を提供する。また、これらの生物圏の大気・海洋や固体地球との相互関係を理解することで、将来発生し得る地球環境変動の影響評価に貢献する。

このため、平成 25 年度は以下の研究を実施する。

(イ) 海洋生物多様性研究

海洋を中心とする生物圏を構成する生物の多様性について、海溝、海山、閉塞水域、中・深層域、海洋表層部等において、生物の多様性を生み出すメカニズム、現在の生物分布や量を規定する要因を明らかにするため、海洋生物に特異な進化過程や生態系の多様な機能に関する研究を行う。東北地方太平洋沖地震の生態系に対する影響や資源生物の動態を把握するために、三陸沖の深海生態系や沖合底層生態系の調査研究を行う。具体的には、

- a. 共生により生じる共生者のゲノム進化や、共生機構において宿主や共生者の果たす役割等を解明する

ため、化学合成共生システムにおいて、共生細菌のゲノム解析や宿主の発現遺伝子解析を行うとともに、共生細菌獲得メカニズムを解明するための飼育培養実験を実施する。また、宿主および共生者の分子系統の高解像度解析を行う。

- b. 深海生態系を対象に、これまで得られた群集の構成種と群集間の相同性、進化プロセス、生物間の相互作用、生活史を統合的に解析し、深海生物群集の形成過程のシナリオを構築する。また、「しんかい6500」を用い南半球を中心に極限環境生態系を調査する世界一周航海を行い、生命の進化・適応の理解を進める。地震後の生態系に対する研究では、日本海溝における乱泥流や断層形成に伴った生物群集の遷移や放射能の蓄積を把握する。また、三陸沖底層生態系の変動をモニタリングし水産業の復興貢献のために基礎データを提供する。
- c. 発現遺伝子やタンパク質、生理的適応能力などを解析するとともにモノクローナル抗体作成システムによるモノクローナル抗体の作成および、それによる抗原や遺伝発現の局在解析を遺伝子導入技術やバイオイメージング技術などを導入して充実させる。また、飼育実験システムの開発研究を継続する。プランクトン・ベントス飼育・培養実験系を活用し、共生生物の室内飼育・単離培養に資するか評価する。さらに、海洋生物の細胞培養を試み、その特性を調べる。
- d. 生態系変動、分類学、海洋政策策定などに貢献するために日本近海の生物出現記録を網羅した海洋生物データベースの運用や解析ツールを行うとともに、国際プロジェクトにデータを提供する。

(ロ) 深海・地殻内生物圏研究

深海底・地殻内等の極限環境生物圏について、極限環境生物が地球や生物の進化に果たしてきた影響、生息環境変動と生物活動の相互関係についての解明を行う。また、極限環境生物および生物圏の研究を通じてその潜在的有用性を掘り起こし、積極的に産業への応用を行う。具体的には、

- a. 現場環境に近い条件での極限環境生物の生理活性と細胞機能を明らかにするとともに、その活動と生息環境との相互環境を明らかにすることを目的として、実験室内での高温高压培養法や環境工学分野で利用される生化学反応を応用した培養法等の環境再現型培養実験の手法開発を進め、沖縄トラフ熱水活動域や下北八戸沖、南海トラフ泥火山、マリアナトラフ熱水活動域などから採取された掘削海底下試料を含めた試料や堆積物コア試料から、難培養性微生物種の培養や機能解析を一層進める。また中期計画最終年度に際し、その成果取りまとめ公表を行う。
- b. 極限環境生物圏における遺伝子学・代謝産物的な特性を明らかにするために、下北八戸沖、マリアナ海溝チャレンジャー海淵及び菱刈金山地下温泉から得られた各種サンプルを対象とし、メタゲノムをはじめとする網羅的分子解析手法を用いて、データベースの整備および環境と生態系を構成する生物の相互関係の解析のための生物情報学的方法論の構築を進めるとともに、有用遺伝子資源の開拓を行う。また中期計画最終年度に際し、その成果取りまとめ公表を行う。
- c. 深海調査システムを用いて、中央インド洋海嶺、カリブ海中部ケイマン海嶺、マリアナ海溝域に存在する新しい極限環境生物圏の探索・調査を行い、微生物生態系の構造や機能の実態、形成プロセスの概要を把握し、生態系の構造に関与する岩石地質の特性や地球化学的な要因との相互関係の検証を行う。また、地殻内流体採取装置や地殻内現場培養・実験装置、保圧型深海生物捕獲飼育装置、人工熱水噴出孔等を利用した化学合成・電気合成微生物生態系現場培養器、深海・地殻内環境モニタリングセンサー等の開発・試験、改良等を進める。地球深部探査船「ちきゅう」による下北八戸沖や南海トラフ熊野灘

などから採取された掘削コア試料や、南太平洋還流域や南鳥島周辺の外洋堆積物等を用いて、海底下生命探査・バイオマス研究、海底下微生物多様性・代謝機能研究、適応進化と生存戦略機能等に関する研究を行う。それらの研究に必要な、高精度・高感度・高速分析技術の改良・開発を行う。超高空間分解能型二次イオン質量分析器（NanoSIMS）やシングルセル分析ラボ等の研究施設を活用し、海底下における地球科学-生命科学を融合した微小空間システム研究を強化する。また中期計画最終年度に際し、これまでの成果取りまとめ公表を行う。

- d. 上記の手段・装置を用いて、潜在的有用微生物探索、環境バイオリクター等による難培養性微生物培養、シンカイヒバリガイやコシオリエビ、スケーリーフット、アルピンガイといった化学合成生物（共生微生物を含む）の飼育を行い、生物資源の開拓を進めるとともに、創薬分野など有用物質への応用が期待される生化合物、新規機能を有する未知の脂質、抗微生物剤、工業用酵素、新規機能遺伝子等を探索し、バイオリソースの提供方法について検討を継続する。また、極限環境生物圏環境における環境と生態系の相互関係の物理・化学的素過程を明らかにする。特に海洋における生命活動に必須な水の極限環境、中でも高温・高圧の極限である超臨界状態での物理・化学的挙動について、現場環境下に近い状態での挙動を再現・観察する方法を用いて解析を進めるとともに、高温・高圧環境を利用した新技術創出の可能性を探る。これらについても中期計画最終年度に際し、これまでの成果取りまとめ公表を行う。

（ハ）海洋環境・生物圏変遷過程研究

地球内部・大気・海洋の変動と生息環境の変遷等との関連について、地球-生物-環境の相互作用に着目し、古環境の検討・復元を行う。これにより、海洋環境と生物圏の形成・変遷過程を解明するとともに、現在および将来発生し得る地球環境変動の影響評価に資する。具体的には、

- a. IODP 航海（ベーリング海、南極海、南太平洋）ですでに採取されている堆積物試料の解析を進める。特に、南極海の試料に関しては、脂肪酸の放射性炭素年代を用いて堆積年代を推定する方法論の確立として、また南太平洋で採取された試料は、堆積物中におけるアミノ酸の動態について解析する。大陸斜面の貧酸素海域、深海平原、海溝など異なる海域での生物活動、物質循環について、現場同位体実験の試料解析から明らかにする。また、長期モニタリングの結果解析を進める。天然・人工放射性核種を用いた堆積過程とバイオターベーション深度の測定についても鋭意分析を進める。
- b. 機構の研究船を用いて、現場観測を行う。特に、アミノ酸の窒素同位体比を用いた食物連鎖の解析を実施する。環境再現水槽を用いた環境-生物相互作用の実験的理解のため、実験室内で堆積物中の pH、酸素、硝酸塩、硫化水素などの環境を制御するとともに、勾配を模したゲル培養を行い、底生有孔虫の環境応答の様子とそのメカニズムを明らかにする。
- c. 微量放射性炭素同位体比法の確立を上記南極海堆積物試料を使って行う。また、メタン菌の新規バイオマーカーとして補酵素 F430 の分析法を確立し、それを用いたメタン生成場の解析を進める。さらに、IODP 掘削で得られたサンゴ試料についてホウ素同位体比分析に基づく海洋 pH 変動の研究を行う。マルチコレクター誘導結合プラズマ質量分析計（MC-ICP-MS）を用いた同位体精密分析法の開発を行う。

④ 海洋資源の探査・活用技術の研究開発

機構が実施する海洋に関する研究開発や、国家基幹技術の成果を最大限活用し、新たな海洋資源探査に必要なシステムを開発・実証するとともに、探査手法の研究開発を実施し、我が国の海洋資源の確保に貢献する。

(イ) 資源探査システムの開発・実証

a. 国家基幹技術である「海洋地球観測探査システム」に位置づけられる「次世代型深海探査技術の開発」で得られた技術を活用し、海底資源の調査研究に供する新たな自律型無人探査機 (AUV) および高機能遠隔操作無人探査機 (ROV) の開発・建造を実施するとともに要素技術の高度化を行う。これにより、地球環境、地殻変動等の解析に必要な海洋データの取得、詳細な海底地形図の作成、海洋資源の探査等に資する。具体的には、

- ・ AUV に関しては、平成 24 年度に整備した AUV の運用を通じた性能向上を行う。また、長距離測位・通信、複数機制御システム、次世代小型動力源、計測認識判断システム、次世代ネットワーク技術、水中充電に係る要素技術の高度化に関する開発を進める。
- ・ ROV に関しては、平成 24 年度に組立完了した ROV の性能確認試験を実施するとともに不具合点の抽出を行い、運用を目指した検討を実施する。また、新一次ケーブルの製作を引き続き推進するとともに、多重連結ケーブル、高度作業技術、次世代推進システム等の要素技術の高度化に関する開発を進める。

b. 国家基幹技術である「海洋地球観測探査システム」に位置づけられる「深海底ライザー掘削技術」で得られた技術を活用し、地球深部探査船「ちきゅう」が海洋資源開発に必要な掘削活動や所期の研究成果を挙げるための科学掘削等を、安全かつ効率的に実施するための運用および機器・システムに係る技術開発を行うとともに、船体を含むシステム全体の効率的な維持・管理に資する知見を蓄積する。具体的には、

- ・ 大深度掘削技術の開発に関連して、タービンモータを組み込んだ泥水駆動型コアバーレルの実用化、及び大深度用ドリルパイプの高強度化に向けた開発を推進する。
- ・ 大水深掘削技術の開発に関連して、強潮流下での掘削に向けてより精度の高い疲労寿命評価計測システムの開発等を行う。
- ・ 採取時に掘削流体による地層試料の汚染を抑制するゲルコアシステムの開発に向けた検討を行う。

(ロ) 海洋資源の探査手法の研究開発

海域における資源の有望性を明確化するための新たな資源探査手法の確立に向けて、海洋資源の成因の解明等に関する研究開発を実施する。具体的には、

- a. 平成 24 年度に「ちきゅう」を用いて南海トラフ熊野灘第五泥火山や青森県八戸沖より掘削されたコア試料を用いて、同環境の炭素・エネルギー循環システムの解明に資する地球生命工学的研究を展開する。特に、高知コア研究所に設置されているジオバイオリクターシステムを用いて、二酸化炭素からのエネルギー再生化に関する生物化学・電気化学的反応について様々な想定実験・検討を行い、新しいイノベーション技術の創出を図る。また、平成 24 年度に確認されたメタンハイドレートの露出海底環境が存在する上越海丘において、液体二酸化炭素のマイクロエマルジョンを現場の海底堆積物に注入し、ゲスト分子置換によるメタン回収と二酸化炭素のハイドレート化を組み合わせた反応が起きるかどうかを確認し、それに付随する pH や化学成分組成等の環境変化をモニタリングする。さらに、種子島沖海丘群については、平成 23-24 年度の「うらしま」による海底地形探査でカバーしきれていない海域について引き続き調査を行う。
- b. 引き続き、中部沖縄トラフ、伊平屋北フィールド周辺海域の火山地形を対象として、AUV を用いた海底微地形調査や表層構造探査、サイドスキャンソナーによる熱水プルーム探索、さらにはマルチ化学

センサーによるその場観測と多連採水による同位体比分析による海底下熱水循環規模推定を行い、巨大海底下熱水循環システムを探查する。また、「ちきゅう」等で得られた試料の分析を実施し、海底下熱水金属硫化物鉱床の成因や熱水駆動型海底下生命圏の存在様式についての第一弾成果を創出する。

- c. IODP によって得られたいくつかの堆積物試料をモデルケースとして、その中に含まれる F430 の濃度を正確に定量し、メタン生成ポテンシャルを定量する。それをもとに、海底下におけるメタン生成場の特定を目指す。
- d. 鉄マンガンクラストについて、拓洋第 5 海山のみならず、様々な海域で採取された水深の異なる試料の元素濃度分析や Os 同位体分析を行い、クラストの成長速度や成長環境および元素濃集メカニズムの解明を進める。資源泥については、平成 24 年度に引き続き、機構保有コア試料を用いて太平洋での分布を調べるとともに、放射光を利用したレアメタル濃集相の化学種同定と濃集メカニズムの解明を行う。南鳥島沖 EEZ 内航海で得られたコア試料の分析・解析を進め、その成因を探る。また、他の資源についても Os 等の同位体分析や年代分析を実施し、成因等の解明を行う。
- e. 深海生態系に適した環境ベースライン調査とモニタリングの手法を研究し、海底資源開発での環境影響評価の方法を策定する。国内外の関連情報を分析して評価方法の改善を図る。

⑤ 海洋に関する基盤技術開発

海上・海中・海底・地殻内等の多様な環境下における調査・観測を行うための機器等の開発を行う。特に、平成 22 年度まで行った国家基幹技術である「海洋地球観測探査システム」の技術を活用して、深海底や地殻内等の海底下深部での調査研究に必要な観測探査技術開発を行う。また、プレート境界域における地震等の地殻変動の把握および深海底環境変動を海中・海底において継続して観測するための技術開発を行う。さらに、海洋科学技術以外の研究開発分野や産業への応用等を見据えた先進的な基盤技術の開発を行う。

このため、平成 25 年度は以下の技術開発を実施する。

(イ) 先進的海洋技術研究開発

先進的な海洋技術研究開発として、広域観測データを音響装置、衛星等を介して海中から陸上基地にシームレスに送信することを可能とするシステムの要素技術、人工衛星を利用した遠隔制御システム及び音響測位の高精度化技術の開発を行う。また、先進的海洋構造物の研究開発として 7,000m 以深での高水圧・低温の大水深環境下で使用を可能とする複合材の表面処理技術の開発や軽量高強度のセラミックス複合材等の開発を実施する。また、海上・海中におけるブイシステムや中継機器等に使用可能な長期観測機器用の新たな電力源システム等の技術開発を行う。そして、AUV・ROV の機体の最適設計技術や従来の概念にとらわれない、より厳しい海気象時でも対応可能な AUV 揚収技術等の開発・評価を進める。さらに、水中観測機器で取得した多様な生物データ等の個体選別を可能とする機器制御システムの要素技術、生物分布の把握を高効率で行う機器等の開発を行う。

また、観測現場において自律的に計測・判断するシステムの要素技術として、バイオセンサー、化学センサー、物理センサー等の組み合わせ及び小型化に関する研究を実施するとともに、AUV・ROV 等に搭載可能な小型の CO₂ センサーや溶存酸素センサー、フロー式分析装置等のさらなる小型化、高精度化技術の開発を行う。

(ロ) 地球深部探査船「ちきゅう」による世界最高の深海底ライザー掘削技術の開発

国家基幹技術である「海洋地球観測探査システム」に位置づけられる「深海底ライザー掘削技術」のうち、「ちきゅう」等の掘削孔に設置し、地震等の地殻変動等海底下の変動を直接観測するための孔内計測装置の開発を実施する。具体的には、

- ・ C0010 ライザーレス孔用長期孔内観測システムの準備を行うとともに、ライザー孔用長期孔内観測システムに使用可能なテレメトリシステムの検討を進める。

また、「深海底ライザー掘削技術」のうち、大水深・大深度掘削等の技術開発については、これまでの成果を活用し、「海洋資源の探査・活用技術の研究開発」において実施する。

(ハ) 次世代型深海探査技術の開発

国家基幹技術である「海洋地球観測探査システム」に位置づけられる「次世代型深海探査技術の開発」については、これまでの成果を活用し、「海洋資源の探査・活用技術の研究開発」において実施する。

(ニ) 総合海底観測ネットワークシステム技術開発

ケーブルで結んだ多数のセンサーから構成されるリアルタイム総合海底観測システムに関する研究開発およびそれらの構築・運用を行う。これにより、プレート境界域における地震等の地殻変動および深海底環境変動を海中・海底において、継続的に観測することを可能とする。

このため、相模湾初島沖、北海道釧路・十勝沖、高知県室戸岬沖および愛知県豊橋沖の各観測システムを運用し、リアルタイム観測ならびにデータ配信・公開を行うとともに、海底観測システム運用上の課題である海底ケーブル障害保守技術の開発について、これまでに実施した実海域実験結果等を踏まえ課題を整理し対策を検討する。また設置から十年以上が経過し、保守用部品の製造中止等により従来どおりの保守・運用が困難となりつつある陸上局設備や各種装置について、まず読み出し手段喪失等の危機にあるレガシー・データの救済・発掘を進め、代替手段等による対策とともに改良方法を検討する。

(ホ) シミュレーション研究開発

海洋科学技術に関する基盤的研究開発の推進のため、他の研究分野への応用を見据え、必要とされるシミュレーション手法やデータ処理技術等の研究開発を行う。具体的には、

- a. 時空間的な解像度や継続期間などの点で制約のある現場観測を補完することを目的として、「地球シミュレータ」用に開発された海洋大循環モデル (OFES)、大気大循環モデル (AFES)、大気海洋結合モデル (CFES) を用いた高解像度・長期シミュレーションデータセットを構築するために、モデル群の精度向上に必要な改良などの研究開発を行う。シミュレーションを応用した観測システム設計手法の開発のため、AFES を用いたアンサンブル大気再解析データセットの作成、機構が北極海や西太平洋で実施した特別観測データ等の定量的評価、及び海氷・陸面・温室効果気体等へのアンサンブルデータ同化手法の適用を行う。また、複雑・非線形・非定常な系である気象・気候変動現象を対象に、全球規模スケールの気候変動が地域の環境にどのような影響を与えるかについて、様々な時空間スケールを扱える超高速かつ高精度な大規模シミュレーションを、全球／領域対応の非静力学・大気海洋結合モデル (MSSG : メッセージモデル) を用いて、過去の事例現象との比較解析と検証、さらに、短期、中長期への予測シミュレーションの拡張、および他モデルとの再現および予測性能の比較を行い、MSSG の

さらなる高度化を実現する。平成 25 年度においても台風予測シミュレーションを継続し、更に、豪雨を含む顕著現象の予測シミュレーションを実施する。

- b. 大規模シミュレーションにおけるデータ可視化手法の研究開発と可視化研究における新領域の開拓を目指し、可視化専用並列計算機環境を用いた先進可視化プログラムの開発および高品位な表現技法の研究を継続するとともに、大規模シミュレーション結果をリアルに表現し社会へ情報発信するための研究開発プロジェクト「EXTRAWING」における情報発信・提示手法の研究開発、および海洋地球科学分野のシミュレーションに対するデータマイニングの有効性についての研究を行う。
- c. 文部科学省の補助事業である先端研究基盤共用・プラットフォーム形成事業および連携機関との共同研究等を通して、シミュレーション手法の産業応用を行う。

(2) 統合国際深海掘削計画 (IODP) の総合的な推進

統合国際深海掘削計画 (IODP) における主要な実施機関として、IODP の国際枠組みの下で地球深部探査船「ちきゅう」を運用し、乗船研究者に対する船上での科学的・技術的支援、データや掘削コア試料の保管・管理等を行う。また、同計画の円滑な実施のため、適切な管理体制の下「ちきゅう」の安全かつ効率的な運航計画の策定や成果の管理などのプロジェクト管理を的確に実施する。また、我が国における IODP の総合的な推進機関として、IODP の研究活動に主体的に参加するとともに、国内の研究者に対して IODP への参画に向けた支援等を行い、我が国の深海掘削計画に関わる研究者コミュニティを牽引する役割を果たす。

このため、平成 25 年度は以下の業務を実施する。

① IODP における地球深部探査船の運用

IODP において地球深部探査船「ちきゅう」の安全かつ効率的な運用を実施する。具体的には、以下の業務を実施する。

(イ) 科学掘削の推進

IODP の枠組の下策定された科学計画に基づき、IODP に参加する研究者との密接な連携の下、南海トラフ等において地球深部探査船「ちきゅう」を用いた掘削を実施することにより、IODP 全体の科学目標の達成に寄与する。

(ロ) 科学支援の充実

地球深部探査船「ちきゅう」船上等における研究設備・システムについて、研究者（外部乗船者）の要望や希望を調査・検討し、船上の科学支援に関する質を維持・発展させるとともに、「ちきゅう」から得たデータ等に係る研究用データベースを維持・運用し、データを適切に管理し、円滑に公開を行う。これにより、乗船研究者およびその他 IODP 関連研究者が最大限の能力を発揮できる環境を提供する。

(ハ) 地球深部探査船の運用に関する技術の蓄積

南海トラフ等における地球深部探査船「ちきゅう」の IODP による国際運用や外部資金による資源探査のための掘削等を通じて、「ちきゅう」を安全かつ効率的に運用し、維持・管理するための機器・システムに係る

技術の蓄積を行う。また、これまでの開発成果の「ちきゅう」での運用を通じ、そこから得られる課題や知見を深海底ライザー掘削技術の更なる開発・整備に資する。

② 掘削コア試料の保管・管理および活用支援

高知大学との連携・協力により「高知コアセンター」を適切に管理運営するとともに、再配分された IODP legacy コア試料および「ちきゅう」等によって得られた IODP 掘削コア試料を保管管理し、研究者への試料提供を含めた試料活用支援を行う。また、微生物用凍結掘削コア試料の保管管理および活用に関する研究開発を実施する。

② 国内における科学計画の推進

我が国における IODP の総合的な推進機関として、研究課題を提案するなど積極的に参画するとともに、計画の主導国としてふさわしい研究成果を発信する。IODP 掘削提案作成に向けた事前調査やデータ解析等への支援および国際ワークショップの開催や派遣等を行う。乗船研究支援については、乗船前トレーニングや試料解析等乗船後の研究を支援する。また IODP に関連する国際委員会への日本人委員の派遣や研究航海事前事後の会議への乗船研究者派遣を通して、深海掘削科学計画の主導国としての役割を果たす。一方、2013 年からの次期 IODP フレームワークに対応する国内科学支援の方策を検討し適宜実施していく。

(3) 研究開発の多様な取り組み

① 独創的・萌芽的な研究開発の推進

基盤的な研究のうち、将来研究ニーズが高まると考えられる研究課題について、独創的な研究開発を推進するため、平成 16 年度から実施している「研究開発促進アワード」については継続課題を実施する。

また、重点研究開発領域における成果を統合し体系化を行うとともに、新たな視点による知見の融合によって、海洋科学の新しい体系の構築のための独創的な研究課題を開拓するとともに、研究成果の社会への応用に貢献する。このため、研究領域融合型のシステム科学的アプローチにより新分野を開拓するプロジェクトとして設置している「システム地球ラボ」において、先カンブリア紀の初期地球生命システムとその進化プロセスの解明に係る研究及び宇宙・地球表層・地球内部の相互作用についての包括的理解に向けた研究を実施する。

「アプリケーションラボ」は、地球科学を核とする多様な情報から新たな価値情報を創成するための研究開発、気候変動予測とその情報を社会的ニーズに即した形態へと変換して提供するための研究、および深海を対象とする開発と保全の調和を見据えた評価技術の確立において、それぞれの具体的実現のための調査及び研究を行う。

② 国等が主体的に推進するプロジェクトに対応する研究開発の推進

国等が主体的に推進するプロジェクトについて、組織横断的に対応するための体制を構築し、推進する。このため、「地震津波・防災研究プロジェクト」において、海溝型巨大地震のリアルタイムモニタリングシステムの開発、地震発生評価研究による地震津波・防災への応用研究およびそれらの推進による被害軽減に向けた予測・評価システムの構築のための研究開発等を行う。また、地震・津波で激変した東北太平洋沿岸の生態系の解明を行い、三陸沿岸の復興を図る目的から、「東北マリンサイエンス拠点形成事業」に取り組んでいく。

さらに、気候変動によって社会が背負うリスクに関する研究の重要性が高まるなか、予測技術の向上とリスク管理に資する基盤情報を創出するため、「気候変動リスク情報創生プログラム」に貢献していく。

③ 共同研究および研究協力

国内外の大学、企業、研究機関等との連携により有益な成果が期待できる場合に、機関連携、共同研究等の適切な連携協力関係を構築し、海洋科学技術に関する基盤的研究開発等を積極的に行う。

平成 25 年度は、平成 24 年度までに締結した機関連携協定、共同研究を継続するとともに、新規の機関連携、共同研究についても引き続き積極的に推進する。

④ 外部資金による研究の推進

文部科学省等の政府機関、独立行政法人、国立大学法人、その他公益法人等が実施する競争的資金をはじめとする各種公募型研究への応募を積極的に行う。これにより、国、民間企業等からの委託費、補助金等の研究資金を積極的に導入し、海洋科学技術に関わる多様な研究開発を実施する。その際、「競争的資金等における研究資金の管理に関する規程」、「競争的資金等の研究資金に係る不正防止計画」等に基づき、研究資金の適正な執行を確保するための体制等を適切に運用し、研究資金の不正使用を防止する。

⑤ 国際的なプロジェクト等への対応

海洋科学技術分野における我が国を代表する機関として、国際的に大きな役割を果たすため、世界気候研究計画（WCRP）、地球圏-生物圏国際協同研究計画（IGBP）等の国際的な科学計画および全球地球観測システム（GEOSS）等の国際的取り組みに適切に対応する。

アラスカ大学との国際北極圏研究センター（IARC）における研究協力については、共同研究テーマを設定し実施する。ハワイ大学との国際太平洋研究センター（IPRC）における研究協力については、協力の領域を定める「JAMSTEC-IPRC Initiative」の下で、7つの研究課題に取り組む。また、平成 24 年度までに締結した 21 件の国際的な研究協力協定に基づき、国際的な研究協力・交流を積極的に進めるとともに、双方向の研究者交流や人材育成を実施する。加えて、平成 25 年度締結期間が終了する予定の各研究機関との研究協力協定の更新を行う。

我が国の政府間海洋学委員会（IOC）に関する取り組みを支援する体制を整備する一環として、IOC 協力推進委員会を運営する。また、海洋法に関する国際連合条約（UNCLOS）、生物の多様性に関する条約（CBD）、気候変動に関する国際連合枠組条約（UNFCCC）等を背景とした国際動向を把握するとともに、これら国際活動との関わりを把握し、関係部署より得られた情報や具体的事例等を整理・蓄積することで、地球規模の課題の解決に対し、機構の活動による知見の提供等、科学技術的側面から貢献していく。

2. 研究開発成果の普及および成果活用の促進

(1) 研究開発成果の情報発信

研究開発の成果を論文や報告等としてまとめ、国内外の学術雑誌に 960 報以上発表する。なお、論文については研究開発の水準を一定以上に保つため、査読論文の割合を 7 割以上とする。また、当機構独自の査読付き論文誌「JAMSTEC Report of Research and Development」を年 2 回発刊し、インターネットで公開する。

得られた成果を積極的に社会へ情報発信するため、研究報告会をはじめ、国際シンポジウム、研究成果発表会、各種セミナー等を積極的に開催する。

(2) 普及広報活動

- a. プレス発表やインターネットを活用し、研究の必要性や研究成果等の情報発信を国内外に対し積極的に行う。ウェブサイトの運用については、週1回以上更新し、年間アクセス820万件以上の閲覧を確保する。
- b. 速報性を有する情報を掲載した刊行物として、「JAMSTEC ニュース なつしま」を年12回発行する。
- c. 研究成果等の詳細情報を一般国民が理解しやすい内容で掲載した広報誌として、「Blue Earth」を年6回発行する。
- d. 横須賀本部、横浜研究所、むつ研究所、高知コア研究所、国際海洋環境情報センターの施設・設備の一般公開を年1回以上開催する。また、各拠点について、見学者を常時受け入れ、機構全体で1年あたり28,000人以上受け入れる（船舶の一般公開での見学者数を除く）。保有船舶の一般公開についても自治体等との連携において適宜開催する。また、初島の海洋資料館を通年開館する。
- e. 海洋に関する理解を増進させるため、研究成果を活用し、対象者を明確にした体験学習研修プログラムおよび船舶等を利用した人材育成事業を充実し、人材育成に積極的に取り組む。また、科学館・博物館等と連携した一般向けセミナー、機構の調査研究活動の紹介を行うブース展示、講演会や出前授業など、海洋に関する理解の増進、海洋科学技術の普及・啓発活動を効果的・効率的に実施する。

(3) 研究開発成果の権利化および適切な管理

知的財産の質を維持し活用するため、また、機構の有する研究開発成果の産業応用を見据え、国内外を合わせて年間35件以上の特許出願を行う。その際、民間企業との共同研究開発等を積極的に行う。取得特許等については、登録維持年金納付年次が7年を迎えるものについては、実施許諾契約により知的財産収入が見込める場合や特別な事由がある場合を除き、原則放棄することで効率的な維持管理を行う。

得られた研究開発成果に付加価値をつけ、社会や国民経済に還元するための取り組みを積極的に行う。これについて、新たな社会的価値や経済的価値を生み出すイノベーションの創出支援を行うため、以下の取り組みを行う。

- a. 産業界や自治体、大学等の研究機関との積極的な交流を通じた研究開発成果や機構の保有する施設・設備等を活用した産業利用等を促進させるため、平成19年度から実施している「実用化展開促進プログラム」を継続して実施する。
- b. 研究開発成果の普及・活用の促進を通じ、研究開発成果が社会経済活動に活用された結果として得られた資金を新たな研究開発に投入することで、継続的なイノベーション創出を促進する知的創造サイクルを構築する。また、これにより機構の研究開発活動を活性化し、知的財産収入を研究者に還元することで適切なインセンティブを与える。
- c. 研究開発成果を活用した「JAMSTEC ベンチャー」の支援強化など、研究成果の社会への還元による社会貢献の手法の多様化を実施する。ベンチャー支援については、「JAMSTEC ベンチャー」設立前後の技術動向調査、市場調査等の支援を継続して実施する。また、「実用化展開促進プログラム」で支援した課題については、プログラム実施中だけでなく、課題終了後も実用化のための支援を継続的に実施する。また、機構が有する画像等の利活用を促進させるなど、海洋地球科学の理解増進につなげるため

の社会貢献事業を継続して行う。一方、深海底をはじめとする極限環境から得られた微生物等を、平成 25 年度末までに 11,500 株以上保管する。得られた菌株・DNA 等の貴重なバイオリソースの保存・管理を行い、「データ・サンプル取扱規程」および共同研究契約等に基づき外部機関等に提供することにより、経済社会活動の発展や国民生活の質の向上に貢献する。

3. 大学および大学共同利用機関における海洋に関する学術研究への協力

研究船共同利用運営委員会事務局である東京大学大気海洋研究所との緊密な連携・協力により、学術研究の特性に配慮した運航計画に基づいて運航等を行う。このため、東京大学大気海洋研究所と機構において、定期的に「学術研究船運航連絡会」を開催し、調整を行う。

その他、必要に応じ、大学および大学共同利用機関における海洋に関する学術研究に関し協力を行う。

4. 科学技術に関する研究開発または学術研究を行う者等への施設・設備の供用

機構が保有する施設・設備を整備し、自ら有効に活用するとともに、科学技術に関する研究開発または学術研究を行う者等の利用に供する。

なお、以下の業務のほか、国等の要請等により実施する機構の試験研究施設・設備の資源探査、緊急の深海探索等への活用については、機構の他の業務に支障を来たさない範囲で行い、社会への貢献を行う。

(1) 船舶および深海調査システム等の供用

機構が保有する 7 隻の研究船（地球深部探査船「ちきゅう」を除く。）、有人および無人深海調査システム等を整備し、自らの研究開発に使用するとともに、各船舶の特性に配慮しつつ、研究開発を行う者の利用に供する。各船の運航業務については、大学および大学共同利用機関における海洋に関する学術研究への協力を配慮しつつ、研究開発に必要な運航日数を確保する。また、平成 25 年 1 月末に退役した「淡青丸」の後継船として、建造を進めてきた東北海洋生態系調査研究船「新青丸」の運航を開始する。新たに建造した AUV については、本格運用に向けた海域試験を実施する。また、海底広域研究船の建造を進める。

トライトンブイ網、RAMA ブイ網（インド洋）の運用を維持するとともに、長期観測に関する各種機器やプラットフォームの機能向上・開発を進める。沖ノ鳥島の観測についても継続する。

(2) 施設・設備の供用

潜水訓練プール等の試験研究施設・設備の整備・運用等を行い、自らの研究開発に使用するとともに、研究開発等を行う者の利用に供する。

(3) 「地球シミュレータ」の供用

「地球シミュレータ」を効率的、安定的に運用するとともに運用経費の抑制に努める。ファイル転送システムやジョブスケジュールなど、利用者の利便性を向上させる方策を検討し、また利用情報や技術情報の提供など、円滑な利用環境の構築を引き続き進める。

民間企業、大学、公的機関等の利用については、文部科学省の補助事業である先端研究基盤共用・プラットフォーム形成事業等を通じ、有償利用へのスムーズな移行と新規利用者の拡大を進める。特に民間等による有償利用については、従来の成果専有型有償利用に加え、平成 21 年度から開始した補助金による成果公開型有

償利用を継続して実施し、有償利用を促進する。また、システム上で効率的に動作するプログラムを整備する一環として、関連機関との共同研究を実施する。更に、HPCI 戦略プログラムに関する計算科学技術推進体制を拡充する。

(4) 地球深部探査船の供用

南海トラフ等における統合国際深海掘削計画（IODP）による国際運用に供するとともに、地球深部探査船「ちきゅう」の運用に資する技術をより一層蓄積することを目的に、科学掘削の推進に影響を及ぼさない範囲で、海洋科学技術の推進に資すると認められる場合において、作業の安全性や経済性などを考慮のうえ、外部資金による資源探査のための掘削等を実施する。

5. 研究者および技術者の養成と資質の向上

海洋科学技術に係わる研究者および技術者を養成し、その資質を向上させるための取り組みを積極的に推進し、機構の研究機関としての機能を強化する。具体的には、

- a. 研究者等を国内外の研究機関、大学等に一定期間派遣し、在外研究等を行わせるとともに、機構も他の研究機関からの研究員を積極的に受け入れる。
- b. 研究者の流動性の確保等に関する諸制度や連携大学院制度を活用し、博士号を取得した若手研究者や大学院生を積極的に受け入れ、機構の研究活動に参加させることにより、海洋科学技術に係わる将来の研究人材を育成するとともに、機構における研究開発を活性化させる。連携大学院については、平成 24 年度までに協定を締結した 17 大学への協力を継続するとともに、新たな大学との連携についても積極的に推進する。
- c. 産業界等との研究者・技術者の人材交流や、機構が有する技術を活用した研修を積極的に行う。海洋科学技術を担う人材養成のための各種講習等に講師を積極的に派遣する。
- d. 海洋科学技術に関し卓越した技術を有する者を指導者とした技術研修制度として、海洋技術研修を計画する。これにより船上・陸上で研究支援を行う技術員の技術を向上させる。

6. 情報および資料の収集、整理・分析、加工、保管および提供

海洋科学技術に関する図書・雑誌等の資料を広く収集・整理し、学術機関リポジトリ等により研究者および一般利用者へ情報の発信と提供を行う。

機構が取得する調査・観測データや、海洋生物・掘削等コア試料・岩石等の各種サンプルについては、各種データや所在情報（メタデータ等）を体系的に収集整理するとともに、品質管理技術の開発、合理的なデータ・サンプルの整理・分析、加工、保管を行う。また、研究者に対して適切に各種データや掘削等コア試料、岩石等サンプルの提供を実施する。これらの実施に必要な運用マニュアル等の整備やサンプル保管管理設備の検討を引き続き進めるとともに、船舶以外で取得された観測メタデータの一元的管理を推進する。さらに関連学会等での活動紹介、および意見交換を実施し、研究者等のニーズに応じた情報の発信、提供を実施する。

これらのデータ・サンプル情報等を効率的に公開・提供するための情報システム群の整備・機能強化を推進するとともに、各種データ等を統融合・可視化することによって、科学的・社会的に有用な付加価値のあるデータや、実利用に資するデータへと変換する。あわせて、データ共有の枠組みづくりのため、国内外のデータ管理機関と連携協力し、研究者のみならず、教育・社会経済分野等のニーズに対応した情報処理提供システム

として「データ創生高次処理システム」の構築を進めるとともに、同システムを用いた付加価値情報の作成を推進する。

地震研究に有益な各種データやシミュレーションの成果情報を統合し、防災減災に資する情報としても発信するためのデータベースの構築を進めるとともに、本格運用に向けた体制の検討を行う。

また、国際海洋環境情報センターにおいて、これまでに蓄積された海洋生物研究成果の公開・提供のため、総合的に閲覧可能なシステムとして「海洋生命情報バンク」の基盤システム機能強化と登録対象種の拡充を推進し、我が国における海洋生命情報に関する情報発信の拠点化を図る。さらに、OBIS（海洋生物地理情報システム）等の国際的な情報システムとの連携強化、その国内拠点の整備および国内のデータの収集を進める。

7. 評価の実施

「研究開発等評価実施規程」等に基づき、柔軟かつ競争的で開かれた研究開発環境の実現や経営資源の重点的・効率的配分に資するため、外部の専門家等の評価者を含めた平成 24 年度の業務の実績に係る自己評価を行うとともに、文部科学省独立行政法人評価委員会等における評価に着実に対応する。機構の運営全般については、上記自己評価と併せ、評価を実施する。

評価結果は公表するとともに、研究開発組織や施設・設備の改廃等を含めた予算・人材等の資源配分に反映させる等、研究開発活動等の活性化・効率化に積極的に活用する。

8. 情報公開および個人情報保護

独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律（平成 13 年法律第 145 号）に則り、積極的に情報提供を行う。

また、独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律（平成 15 年法律第 59 号）に則り、個人情報を適切に取り扱う。

独立行政法人整理合理化計画（平成 19 年 12 月 24 日閣議決定）を踏まえ、業務・人員の合理化・効率化に関する情報公開を行う。

II 業務の効率化に関する目標を達成するために取るべき措置

1. 組織の編制

理事長の強力なリーダーシップの下、研究開発能力、事業企画能力を含む経営・管理能力の強化に取り組む。このため、中期計画に定めた方針に基づき、必要に応じて組織を見直し、柔軟に対応する。

2. 柔軟かつ効率的な組織の運営

事業の開始に際しては、適切な資源配分の観点から、その目的と意義および研究開発の内容、リスクの低減策、コストの最適化、スケジュールなどについて、経営の観点から判断を行う。事業の開始後も、評価等を通じ定期的に進捗状況を確認することにより、コストの増大を厳しく監視し、計画の大幅な見直しや中止を含めた厳格な管理を行うとともに、その進捗状況や成果、研究の必要性等を国民に分かりやすい形で示す。機構が果たすべき社会的役割について、社会情勢の変化に対応できるような組織の編制等を含めた推進方策について

検討を行う。また、計画の見直しや中止が生じた場合には、経営層における責任を明確化するとともに、原因究明と再発防止を行う。

一方、外部の専門的な能力を活用することにより高品質のサービスが低コストで入手できるものについては、外部委託を積極的に活用するなど、業務の効率化と経費の節減を行う。

競争的環境の実現と効率的な資源配分の実施のため、「人事制度規程」等に基づき、職員の業務に関する評価を適正に行い、その評価結果をその後の資源の配分に反映させるとともに、職務、職責および業績に応じた適切な職員の処遇を行う。

3. 業務・人員の合理化・効率化

(1) 各種事務手続きの簡素化・迅速化および稼働中の業務システム（人事給与、財務会計、資産管理、電子申請、勤怠管理、旅費管理、研究成果データベース等）の他業務との連携を考慮した効率的な運用を進めるとともに、平成 25 年度以降稼働開始を予定しているシステム（外部資金管理、新財務会計等）の開発を積極的に実施し、機構業務の効率的な実施に資する。

(2) 業務運営全般に係る経費の見直しを行い、その節減を行うとともに、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、一般管理費（人件費を含み、公租公課を除く。）について、中期目標期間中の削減目標（平成 20 年度に比べその 15%以上を削減）達成に向けた取り組みを実施する。また、その他の業務経費については、平成 25 年度中に 1%以上の業務の効率化を行う。

(3) 「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」（平成 18 年法律第 47 号）において削減対象とされた人件費については、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針 2006」（平成 18 年 7 月 7 日閣議決定）に基づき、人件費改革の取り組みを平成 23 年度まで継続し目標を達成したが、平成 25 年度においても引き続き改革を進める。但し、以下の人員に係る人件費は、上述の人件費改革における削減対象から除外する。

- 競争的研究資金または受託研究もしくは共同研究のための民間からの外部資金により雇用される任期制職員
- 国からの委託費または補助金により雇用される任期制研究者
- 運営費交付金により雇用される任期制研究者のうち、国策上重要な研究課題（第三期科学技術基本計画（平成 18 年 3 月 28 日閣議決定）において指定されている戦略重点科学技術をいう。）に従事する者および若手研究者（平成 17 年度末において 37 歳以下の研究者をいう。）

また、今後の人事院勧告を踏まえた給与改定分についても削減対象から除く。

役員の報酬および職員の給与等については、「独立行政法人整理合理化計画」（平成 19 年 12 月 24 日閣議決定）を踏まえ、その業績および勤務成績等を反映させる。理事長の報酬については、文部科学事務次官の給与の範囲内とする。役員の報酬については、個人情報保護に留意しつつ、個別の額を公表する。職員の給与水準については、機構の業務を遂行する上で必要となる事務・技術職員の資質、年齢構成、学歴構成、人員配置、役職区分、在職地域等を検証し、国からの財政支出の大きさ、累積欠損の存在、類似の業務を行っている民間企業との比較等を考慮した上で、国民の理解を得られる水準とするとともに、これを維持する

合理的な理由がない場合には必要な措置を講じる。また、事務・技術職員の給与については、ラスパイレス指数は既に中期計画上の目標を達成したが、平成 25 年度においても引き続きラスパイレス指数を引き下げる取組を着実に実施し、検証や取り組みの状況については公表する。

(4) 事業等の見直しについては、「独立行政法人の抜本的な見直しについて」（平成 21 年 12 月 25 日閣議決定）等を踏まえ、事務・事業および組織等の合理化・効率化に向けた必要な措置を講ずる。

(5) 既存事業の徹底した見直しを行い、業務の効率化を行う。一方、外部研究資金、企業等からの受託収入、特許実施料収入、施設・設備の供用による対価収入等を計画的に活用する。特に、運用に多額の経費を要する地球深部探査船「ちきゅう」については、外部委託の活用、国際資金の効果的な活用等により、その経費を検証し、効率的な運用を行う。

(6) 政府の情報セキュリティ対策における方針を踏まえ、適切な情報セキュリティ対策を推進する。

Ⅲ 予算（人件費の見積もり等を含む。）、収支計画および資金計画

1. 予算

平成 25 年度予算

(単位：百万円)

区分	金額
収入	
運営費交付金	34,449
施設費補助金	7,166
地球観測システム研究開発費補助金	1,458
事業等収入	1,509
受託収入	2,406
計	46,988
支出	
一般管理費	1,284
(公租公課を除いた一般管理費)	800
うち、人件費（管理系）	544
物件費	257
公租公課	484
事業経費	34,674
うち、人件費（事業系）	2,118
物件費	32,556
施設費	7,166
地球観測システム研究開発費補助金	1,458
受託経費	2,406
計	46,988

[注]各欄積算と合計欄の数字は四捨五入の関係で一致しないことがある。

2. 収支計画

平成 25 年度収支計画

(単位：百万円)

区別	金額
費用の部	
經常費用	35,347
業務経費	23,659
一般管理費	1,284
受託費	2,406
補助金事業費	904
減価償却費	7,092
財務費用	83
臨時損失	0
収益の部	
運営費交付金収益	25,777
受託収入	2,406
補助金収益	904
その他の収入	1,509
資産見返負債戻入	4,808
臨時利益	0
純損失	△25
前中期目標期間繰越積立金取崩額	25
目的積立金取崩額	0
総利益	0

[注]各欄積算と合計欄の数字は四捨五入の関係で一致しないことがある。

3. 資金計画

平成 25 年度資金計画

(単位：百万円)

区別	金額
資金支出	
業務活動による支出	27,588
投資活動による支出	16,391
財務活動による支出	3,039
次期中期目標の期間への繰越金	0
資金収入	
業務活動による収入	
運営費交付金による収入	34,449
補助金収入	1,458
受託収入	2,406
その他の収入	1,509
投資活動による収入	
施設整備費による収入	7,166
財務活動による収入	0
前期中期目標の期間よりの繰越金	0

[注]各欄積算と合計欄の数字は四捨五入の関係で一致しないことがある。

4. 自己収入の増加

外部研究資金として国、他の独立行政法人、企業等多様な機関からの競争的研究資金をはじめとする資金の導入をする。また、国、他の独立行政法人、企業等からの受託収入、特許実施料収入、施設・設備の供用による対価収入等自己収入の増加に向けた取り組みを実施する。

自己収入額の取り扱いにおいては、各事業年度に計画的な収支計画を作成し、当該収支計画により運営する。

5. 固定的経費の節減

管理業務の節減を行うとともに、効率的な施設運営を行うこと等により、固定的経費の節減をする。

6. 契約の適正化

「独立行政法人整理合理化計画」を踏まえ、機構が締結する契約については、真にやむを得ないものを除き、原則として一般競争入札等によることとする。また、「随意契約等見直し計画」を踏まえ、契約の競争性・公平性の確保に努めるとともに、その取り組み状況をウェブサイトにて公表する。

また、内部監査および第三者による契約をはじめとする会計処理に対する適切なチェックを行う。

IV 短期借入金の限度額

短期借入金の限度額は 93 億円とする。短期借入金が想定される事態としては、運営費交付金の受入れの遅延、受託業務に係る経費の暫時立替等がある。

V 重要な財産の処分または担保の計画

なし

VI 剰余金の使途

決算において剰余金が生じたときは、重点研究開発その他の研究開発、設備の整備、広報・情報提供の充実の使途に充てる。

VII その他の業務運営に関する事項

1. 施設・設備に関する計画

平成 25 年度に取得・整備する施設・設備は次のとおりである。

(単位：百万円)

施設・設備の内容	予定額	財源
研究船および深海調査システムの整備・改良	7,166	船舶建造費補助金
用地取得	500	運営費交付金

[注] 金額については見込みである。

2. 人事に関する計画

(1) 方針

- ①業務運営を効率的、効果的に実施するため、優秀な人材の確保、適切な職員の配置、職員の資質の向上を行う。
- ②職員のモチベーションを高めるため、人事評価制度等を活用し、適切な評価と、結果の処遇への反映を行う。
- ③男女共同参画の意味する仕事と家庭の両立や、多様化した働き方に対応するための職場環境の整備や育児支援等を行う。

(2) 人員に係る指標

業務の効率化を進め、常勤職員数（任期制職員を除く）については削減を行う。

(参考)

平成 25 年度当初の常勤職員数 322 人

平成 25 年度末の常勤職員数の見込み 321 人

[注] 任期制職員を除く

3. 能力発揮の環境整備に関する事項

職員の資質向上を目的とし、職員に要求される能力や専門性の習得および職員個々の意識改革を進めるため、「人事制度における職員育成基本計画」を定め、職員の育成・研修を戦略的、体系的かつ計画的に実施する。